

妄想の深層心理—— ユングからラカンへ ——(2)

西村 則昭

本稿(2)では、統合失調症の臨床事例(西村, 1998)の再解釈が、特にクライアントの報告した三つの夢をめぐって試みられた。クライアントは面接過程の中で、アニマ像に導かれ、現実界に接近し、父の名の体得が行なわれるべき場へと再び到った。しかし主体は父の名の課す去勢を建設的な体験にすることができず、激しい怒りの反応を呈するだけで、父の名の受け取りを自ら拒否し、象徴界の外部、現実界の真っ只中に留まったまま、象徴界との凄まじい緊張関係に立たされる道(精神病者への道)を選んだ。心理療法はそのことを確認するために行なわれたようにも思われた。総合的考察では、『ブランビラ王女』における主体(ジーリオ)との比較によって、精神病的主体のあり方が浮き彫りにされ、そして物自体に相応するイメージを紡ぎ出し、主体を現実界へと接近させる存在として、ラカンの捉え直されたアニマが、ラカン理論における対象aに相当することが論じられた。

キーワード：精神病、心理療法、対象a

3. 臨床事例

(1) 概要

クライアント(以下CI)：20代半ばの男性。

経歴：CIは三人兄弟の真中。内気な子どもだった。兄弟喧嘩はしたが、他の子とは争わなかった。父には馴染めない感じがずっとあった。小学生の頃から、父の転勤が相次いだ。思春期になって、「性的な雰囲気」を嫌い出した。中学3年のとき、自分の家族が「本当の家族」ではなく、「本当の家族」のところに「妹」がいて、その「妹」と結婚するという妄想がではじめた。中学3年のとき恋したクラスメイトの女子Aさんが、その「妹」に思えた最初の人だった。以後「妹」に思える女性は、何人かの芸能人に変っていった。高校になって緊張感が高まり、「見られている」感じが強くなり、精神科に通院するようになった。学校での昼休みは一人図書室で過ごすことが多かったが、このときユングの『人間と象徴』を見つけ、これこそ自分を改造できるものと思った。高校は2年留年した。18歳のとき上半身が動かなくなり、腕が折れ曲がって勝手に動くようになり、精神科に半年間入院し、高校

は中退した。退院してからは、外来治療(途中、父の転勤のため、転院)を受けていた。21歳のとき、自殺未遂。1週間分の薬を一度に服んだ。2日間、意識不明となったが、病院に連絡されず、家で看病されたことが不思議だった。22歳のとき、興奮が高まり、家で暴れ、家具を壊し、再度入院(半年間)となった。この入院期間中、自分は「星の代理人」で、「妹」と一緒に世界を救済するなどといった様々な妄想が起り、また妹に思われていたロック歌手Bを、「組織」が「機械」を使って、彼の病室に送ってきて、彼はキスし愛撫し、彼女の唾液や髪への感触もはっきりと感じられた、などといった病的体験があった。退院後、外来治療を受けていた。福祉関係の専門学校に通い、卒業した約1ヶ月後、「夢分析」を求めて自ら来談の申し込みをした。『人間と象徴』と出会って以来、「夢分析」は何か「高尚」で「神秘的」なものに思われ、憧れだった。その頃、主治医は海外出張で、代理の医師に「夢分析」の許可を取った。CIは医者にも母にも、何か仕事をするを勧められていたが、「仕事には向いていない性格で、就職先に迷惑をかける」と思い就職はしていなかった。主治医の診断は統合失調症。

妄想：面接がはじまって、CIが現在もっている妄想として私に語ったものは、1)今の家族が「本当の家族」ではなく、「本当の家族の妹」と結婚し、子どもを作り、暖かい家庭を築くという妄想。「家族否認症候群」(木村他, 1968)に属する。またその妄想を抱くと相手の女性を傷つけ、墮落させることになることになり、B(ロック歌手)の歌が駄目になってしまったのは、自分のせいであると罪悪感を語った。2)「二重人格」の妄想。「もう一つの人格」は「ユング」をはじめ「救世主」などであった。自分は「ユングの生まれ変わりである」とも語られた。これは誇大な二重身妄想といえる。「もう一つの人格」と合体することで、健康になれるなどと考えられた。3)「見られている」という妄想(注察妄想)。家の居間とテレビのスタジオとが「繋がっていて」、居間で話していることが向こうに筒抜けになっている。「組織」に「実験」をされている、「いやがらせ」をされていると語られた(迫害妄想)。「いやがらせ」とは、車の警笛や幅寄せ、道をこちらに向かって歩いてくる人がいて、その人と擦れ違おうと思って心の準備をしておいたのに曲がっていくといったことだった。CIはこれらの妄想を語るとき、よく「これは妄想ですが」といった前置きをした。CIは妄想について、「掴まれてしまって、どうしようもない」「半分は妄想だとしても、後半分はどうしても妄想に思えない」などと語った。

対応：この現実と妄想との区別が失われないように留意しつつ、夢を報告してもらい、それについて話し合うことを中心に週一回の面接を行なう。

(2) 夢解釈

以下、面接過程において報告された三個の夢を、それに関するCIのディスカールと共に提示し、私の解釈を述べたい。なお、以下の夢の記述は、CIが記録して持参したものを、固有名は除き、そのまま転載したものである。#はその夢が報告された回。解釈に際して、別のセッションでのCIのディスカールを参照することもある。

夢1(#2)「Aさんと結婚することになっている。その日の朝(式のある朝)、家であわただしく出かける準備におわれている。そこへAさんの家から電話がかかって来て、母が対応に電話に出て、『それはそう

明なんですわ』などと話している。私は出かける準備がととのいつつある」

Aさんは、はじめて「妹」に思えた、中学3年のときのクラスメイトで、この夢を契機に前回語られなかった彼女のことが語られた。CI「Aさんは頭がよかった。Aさんには一度、電話で思いを伝えた。『そう明なんですわ』とは、彼女のことが自分のことか、わからない」(「そう明」とは「聡明」のことだろう)。

これは「初回夢(initial dream)」といえるものである。初回夢とは、面接開始時に見られ、これからはじまる面接がどのような方向に進んで行くか、面接の課題が何かを予見する夢で、ユング派において重要視される。AさんはCIが精神病(CIの診断名は「統合失調症(schizophrenia)」であるが、以下の解釈にあたっては、ラカンの用語法にしたがい「精神病(psychose)」を用いる)に突入していく最初の契機となった存在であるといえる。この面接では、精神病への入り口に戻り、そこで一体何が起こったのかを「知る」ことが課題となることを、この夢は予見していたのではないかと思われる(夢の母のいう「そう明」とは、この面接に求められる「知的」な作業を示唆するものであろう)。ラカンによると、精神病には主体がそこに突入した「決定的瞬間(moment crucial)」があるという。「その決定的瞬間を注意して観察してください。そうすれば精神病のすべての入り口への踏み越えの輪郭を定めることができます。それは、他者それ自体から、他者の領域から、主体には受け取られえない本質的なシニフィアンの呼びかけが来る瞬間です」(Lacan, 1981, p. 344)。CIにとって「受け取られえな」かったシニフィアン、それは彼が電話でAさんに思いを伝えたときに電話の向こう側から聞こえてきた音声ではなかっただろうか。それはCIにとってまったく不可解に響く拒否の声ではなかっただろうか(CIは「振られた」とは決していかなかった)。上の引用でラカンが「本質的なシニフィアン」というのは、父の名のことである。CIが電話の向こうから聞いた不可解な拒否の音声、それはまさに父の名であると思われる。

夢1にも電話が登場している。この夢では電話がかかってきて、母が出る。この点はどのように考えられ

るだろうか。幼い子は母親の言葉の中に、自分とは別のところに母親の欲望の対象があることを否応なく感じさせる、不穏な響きを帯びた語、父の名を聞く。それが母子密着を切り離す（去勢する）機能を果たす。このとき幼い主体へと父の名が届くのは、一個の他者（小文字の他者）としての母親の向こう側の、言語としての〈他者〉（大文字の他者）からである。そこから父の名を受け取り、去勢の痛みに耐えてそれを体得することによって、主体は〈他者〉における言語の中に組み込まれる。しかし精神病的主体には、こうした父の名が欠如していると、ラカンという（Lacan, 1955-56/1966）。たしかにわれわれにとって精神病患者とのコミュニケーションは不可能ではない。しかしながら、「精神病患者は、ある種の外的な模倣 (imitation ext-érieure) を除いて、シニフィアンの働きの中に入ることとは決してありません。主体がシニフィアンの領域に統合されていないことが、精神病の前提条件についての問いを立てるための方向性をわれわれに与えてくれます」（Lacan, 1981, p.285）。われわれが精神病患者とコミュニケーションを行なっているとき、彼らは「ある種の外的な模倣」によってわれわれの言葉に反応しているだけであり、「ある種の外的な模倣」ではない真に彼らの実感をわれわれに伝え、それを真にわれわれが受け取るということは、原理上不可能なのである（とはいっても、後述するように、われわれと精神病患者との真の出会いがまったく不可能であるとは、私は思わない）。

では、CIが子どもの頃聞いた母の言葉の中の「父」はどのようなものだったのだろうか。彼はいう、「母は父の悪口ばかり、酒飲む、煙草吸う、マージャンすると、ぼくは父のことを給料持ってくる人としか思っていなかった」（#4）。もちろん精神病患者でなくても、このように父親の存在感のなさを語る人は少なくない。しかしCIが精神病患者であるならば、ここで語られていることは、母のディスクールの中の「父」が、母の欲望の在り処を告げるものとなっておらず、CIにとって父の名の機能を果たすことができず、彼を困惑の真っ只中に突き落とすものであったと受け取られなければならないと思う。

夢1に戻ろう。電話の相手は、〈他者〉における言

語であると考えられる。CIはAさんに電話したとき、そこから父の名の呼び掛けを聞いた。しかし父の名の体得されていないCIにとって、それはまったく不可解な響きとして体験された。そして「シニフィアンの領域」、言語システムの全体が、不可解で無気味で脅威的なものとして姿をあらわしはじめたのではないだろうか。それが後に「組織」や「機械」と呼ばれる、主体を所有し操作する存在として表現されるようになったと考えられる。「神経症者が言語に住んでいるとすれば、精神病患者は言語によって住まわれ、所有されているのです」（Lacan, 1981, p.284）。

夢2（#15 面接開始3ヵ月後）「私はマフィアに殺される死刑囚で、もう一人の人と一緒にマフィアに捕まって殺される順番待ちをしていた。時は刻一刻と迫っていた。私達を捕らえているのは姉弟であった。もう一人の人は射殺されてしまい、次は私の番であった。その姉弟は彼らの友人の女性と食事を共にしていた。食事をしている間だけ私の処刑は延ばされそうであった。その女性は『私が男と寝ないのはどうしてか解る?』といったような質問をしていた。姉弟が『解らない』と言うと、その女性は『私、不感症なのよ』と言った。姉弟は少しおどろいていた。そしてその女性は『一緒に食事してくれる相手（つまり生活を共にする人）もいないし』と言っていた。このような会話にも関わらず、私の処刑は避けられそうではなかった。私は恐怖していた」

CI「記録しなかったが、やくざのおっさんが出てきた。そのおっさんは、女やくざが主人公の映画の悪役のようなだった。夢の中の時間は、もう一人が処刑されるところが長く、会話のところは短かった。処刑は隣の部屋で散弾銃によって行なわれた。姉は20代、弟は10代で、二人は監視役。友人の女性は、あばずれではなく、常識的な普通の女性。『私、不感症なのよ』は、淡々とした調子でいった」

この「処刑」は、次の夢3を合わせて考えると、去勢をあらわしているといえる。通常、去勢は主体がその痛みに耐えることで、主体に父の名を体得させ、以後、主体は去勢（誰かによる拒否や禁止など）に遭遇したとき、それに多少とも耐えることができる。しかし精神病患者はそうした去勢の試練を乗り越えておらず、

彼にとって父の名は体得されないまま、去勢は単に迫害的なものとして体験され、何らかの形で防衛されなければ、まったく耐えられえないものになると思われる。面接はそうした去勢の体験に向って進んでいったように思われる。夢2では、主体は分裂し（夢のCIと「もう一人の人」）、去勢との直面を遅延させようとする空しい努力が払われている。

「もう一人の人」、分裂した主体の一方が「処刑」=去勢されたが、その人が「友人の女性」に変容して登場しているように思われる（夢分析の経験上、夢では同じ意味を担う存在が、形を変えて、再度登場することがよくあるといえる）。つまり、この主体の片割れは、去勢されて「女性」となってしまったように思われる。彼女は「不感症」であること、すなわち、性の欲望を生きることができないことを訴えている。CIは面接の中で、自分に性体験がないこと、自慰もうまくできないことを繰り返し語っていたが、夢の女性という「私が男と寝ないのはどうしてか解る？」には、そうした彼の言葉との連続性が感じられる。CIは「そういうことをしたいと思うけど、見られていて、笑われたら、どうしようもなくなる」（#22）といったこともあった（「見られていて」とは注察妄想）。このようなCIの意識を夢の女性は担っている。そもそも欲望を生きるとは、去勢の試練を乗り越えた結果獲得したファルス（欲望を指し示すシニフィアン）に導かれ、欲動を制御し、欲望を抱え、その充足を永遠に遅延させながら、象徴界の中を動いていくことである。そのように欲望を生きることが、精神病者のCIにはできない。精神病者が欲望を生きることがあるとすれば、それは外的な模倣によって欲動に対処するという仕方によってだけである。夢2では「食事」の場面があったが、食欲のような欲動への対処は割合外的な模倣が容易であろう。しかし性欲のように複雑な人間心理の絡んでくる欲動——その欲動は拒否や禁止に遭遇することが少なくない——に対処し、誰かに対する欲望（恋愛感情）を抱えるということは、外的な模倣ではもはや不可能になってくるだろう。

では、夢2の「友人の女性」が向き合って話をしている相手である「姉弟」は、どのように考えられるだろうか。「姉弟」とは、CIの妄想の「兄妹」と逆転し

ていることに気付かれる。意識の水準ではアニマ＝「妹」よりも主体＝「兄」の方が優勢にあるが、無意識の水準では主体＝「弟」よりもアニマ＝「姉」の方が優勢にあると考えられる。この「姉弟」は、CIを捕縛して、彼を「処刑」しようとしている張本人達である。つまり、CIの無意識＝「姉弟」が、否応なく去勢の体験に向けて心理療法的過程を促進していると考えられる。夢2の連想で「女やくざ」が出ていることから、ここでアニマの迫害的な側面がテーマとなっていることがわかる。CIにとってアニマの迫害性は、それが言語としての〈他者〉の側から主体に父の名の呼び掛けをもたらすことにあると考えられる。CIが精神病者であるかぎり、その呼び掛けは迫害的なものとなる（夢2に関するCIのディスクールにあった「やくざおっさん」が、父の名の迫害性を表現しているだろう）。このような迫害的アニマが主体に対して優勢なCIの無意識が、セラピストに投影されており、その投影された無意識が、夢2で「姉弟」として表現されていると考えられる（「友人の女性」がCIの意識的主体のポジションにあるなら、彼女が自らのことを語る相手である「姉弟」は、セラピストのポジションにある）。

夢3（#37 面接開始9ヶ月後）「過去に日本人が朝鮮人を残虐な目に合わせてきたというので、私は日本人の代表として、足の指を切り取られる刑罰を受けることになった。一人の朝鮮人の男が、捕まっている私にあれこれ文句を述べる。私は刑罰を逃れるすべはないかと、懇願するが、その男は刑の執行を宣告する。どの足の指がいいかと聞かれて、私はしょうがないから、右足の小指を指定する。痛みはそれほどないが、これで不具者になってしまったという衝撃は大きい。刑の執行後に私は、ソウル銀行のカードをもらうが、ねじ切って捨ててしまい、さっきの朝鮮人に、いつかかならず復讐してやるから、と怒りながら、郊外の広々したところを歩いていくと、高校時代の友人EとFと出遭い、刑罰のことを訊かれる。私はその話をすると、Fは思わずうつむき悲しんで、私の不幸に泣いてくれているようだ。とそのとき、MDなど新オーディオ機器が夢に出てくる」

この夢を聞いて私の心には「去勢」（＝足の指の切

断)という言葉が浮かび、去勢の屈辱と怒りを想像し、「すごい怒りでしたか」と訊いた。CIは「はい」といって言葉に詰まっしまい、少し間を置いてから、「禅の本で読んだ白隠^{はくいんぜんじ}禅師の話を読み出す。白隠禅師の近所に住んでいた娘が父親のわからない子を出産した。父親が怒って問い詰めると、娘は白隠禅師の子だといった。それで父親は白隠禅師のところに怒鳴りこんで、子どもを置いていった。そのとき白隠禅師は『ああ、そうか、そうか』といっただけ。後で娘が白状して、父親は子どもを引き取りに来て、謝るが、白隠禅師はまた『ああ、そうか、そうか』といっただけ。これだけの境地は大変なこと。ぼくもあまり怒らない。それでバカにされた。病気が治ったら、怒るようになるのでは。恋愛関係の修羅場では、殺人を犯してしまひそう。私「怒りの夢は他に見たことはありますか?」。CI「この前の夢に出てきたAさん(中学3年のとき、はじめて「妹」に思えた女子)が浮気する夢を高校のときに見て、起きても怒りが収まらなかった」。私「処刑ということでは何か?」。CI「ずっと前に見た『リンチ』というアメリカ映画のポスターを思い出す。皮のビキニをつけた女性の後姿が大きく写っていた」。突然夢の最後に登場した新オーディオ機器に関してCIは、「どうして出てきたのか。MDは買おうと思っている」と述べたが、このとき私は夢のその箇所には大して関心を惹かれなかった。

夢3の中でCIに刑罰を与えるのは、国家という巨大な「組織」であり、それは象徴界をあらわしていると思われる。「過去に日本人が朝鮮人を残虐な目に合わせてきた」という誇大な形で、CI自身の罪悪感が表現されているように思われるが、これは一体どのようなことに対する罪悪感であろうか。CIは、ロック歌手等の現実の女性を「妹」と思うことで、彼女を毀損してしまうのではないかと罪悪感を繰り返し述べていた。CIは、「妹」という語を暗喩ではなく、文字通りの内容を担う語として用いるが、これは言語の掟(父の名)に反する行いに他ならない。またファロスをもたないCIは、ファロスによって象徴界の中を導かれる形で正しく欲望をもつことができず、彼が欲望に駆られるとき、彼は物自体という聖域に直接踏み込んでしまうことになる。したがって、「妹」毀損の

妄想は、現実界侵犯の妄想的表現であると考えられる。そもそも近親相姦は、物自体の聖域を侵すことを意味する(西村, 2008b)。このようにCIの罪悪感は、主体が象徴界の外部に存在し、象徴界の掟に従わず、現実界を侵犯してしまったことに対する罪悪感であると考えられる。そうした彼に象徴界の方から働く掟の作用、父の名の課す去勢が、夢3で刑罰として表現されていると考えられる。このとき去勢は、主体を象徴界に組み込むという建設的な効果を及ぼすことなく、ただただ主体を苛む迫害的なものとなっているように思われる。夢の最後に突然のように挿入された音響機械は、「朝鮮」という国家と同様、主体の外部に存在する、彼にとってまったくもって不可解な象徴界のイメージであると思われる。

夢3のCIは刑罰に対して激しい怒りをおぼえた。その怒りに任せて彼は、貰った「ソウル銀行」のカードを捻じ切ってしまうが、このカードこそ、去勢^{しるし}の徴として主体に体得されるべき父の名をあらわすものではないかと思われる。お金は、その物自体には価値(意味)がなく、われわれが約束の上でそれに価値(意味)を与え、それをを用いてこの現実での生活を成り立たせているものであり、その意味で言葉、特にその音声的＝物質的側面、シニフィアンと同様である。銀行のカードは、お金＝シニフィアンの貯え(象徴界)にわれわれを繋げ、そこからお金＝シニフィアンを自由に引き出し、他者や物事に関わることを可能にする、父の名の的確なイメージであると考えられないだろうか。この夢では象徴界の全体に直面し、父の名を体得すべき瞬間において、主体がどのように反応したかが端的に再現、再構成されて描かれているように思われる。CIの場合、去勢を建設的な体験にできず、父の名の受け取りは完全に主体の側から拒否された。そして主体は現実界の真っ只中に取り残されることになる。それは耐えがたい刺激に充ちた、まことに寄る辺ない状況(トラウマ状況)に置かれることである。このとき主体において、鏡像段階以来の<私>が無効とされ(そうした<私>は「本当」でないことが明らかとなり)、主体は鏡像段階以前に引き戻される。このとき主体は、鏡像段階以前という点で、根源的主体Sであるが、象徴界に対して完全に閉ざされ、象徴界の外部、現実界

にあって、象徴界によって「所有」されている点で、精神病患者特有の根源的主体である。このような根源的＝精神病的主体が、自らに相応しい＜私＞を無制限に自己愛的に構成し、それと同一化することによって、誇大妄想が生じると考えられる。根源的＝精神病的主体は普段、妄想的な＜私＞の背後、さらには「病識」を持つように「治療」されている＜私＞の背後に隠されているが（CIは主治医に繰り返し「病識」をもつようにいわれ続けてきた）、親をはじめ誰かの拒否や禁止に遭遇するとき、すなわち、＜他者＞において働く父の名に直面するとき、激しい怒りを通して外部にあらわれようとするところがあるようである。それはCIのディスクール、「先生から見てぼくが親を憎んでいるのが見通せますか？ 子どもが親を殺害する事件がありますよね。ぼくも殺してやりたいと思うことがある。親に思えない。魂を売り渡してしまったよう」（#26）や、「ここに来る途中、公立の図書館に寄った。鞆を持って閲覧室に入ろうとしたら、図書館の人に注意された。こういうことがあるとイライラする。空想の中で、ピストル撃ちまくったり、ナイフで人を刺しまくったりする」（#44）に伺える。

夢3から1年8ヵ月後（#101回）、CIは夢3に関して次のように述べている、「ソウル銀行のカードをもらってねじ切ってしまうところが面白い。ソウルには『魂』の意味もある（このときCIが皮肉な笑いを浮かべたように、私には感じられた）。朝鮮は分断国家。越えられない境界がある。西洋人はベルリンの壁の夢を見ると『人間と象徴』にあった」。ここでCIの誇大妄想に決定的な役割を果たした『人間と象徴』が想起されている。彼のディスクールに該当する『人間と象徴』の箇所は、ベルリンの壁の写真の載っているところであろう。その写真には、「ベルリンの壁——われわれの世界は神経症者のように分離されている」（河合他訳、1975、p.128）という説明がつけられている。またそれに近い箇所に、「鉄のカーテンの向こう側から西側の人に歯をむいているのは、自分自身の邪悪な影の顔なのである」（河合他訳、1975、p.126）という文章が見出される。

夢3の「ソウル銀行」のカードに関してCIは、「ソウル」という語に「魂（soul）」の響きを聞き取って

いる。そのことを告げる彼の言葉には、彼のアイロニー、魂を失ってしまったという痛切な自嘲の念がこめられているかもしれない。銀行のカード＝父の名を放棄し、想像界を象徴界から乖離させてしまうことが、想像界から生命＝魂を奪ってしまうことになる、CIは直観的にわかったのかもしれない。

ところで、象徴界の全体と直面し、父の名が体得されるか体得されないかの瞬間は、精神病患者とわれわれが真に共有し合いうる瞬間ではないだろうか。その瞬間が分かれ目で、そこから精神病患者とわれわれは別々の道を歩むことになる。この瞬間に立ち会うことで、われわれは一瞬でも——たとえそれが擦れ違いにすぎないとしても——彼らとの本質的な出会いが可能となるのではないだろうか。2年半近く面接を続けてきて彼が語った言葉にあった朝鮮国家の「分断」という語、それはまさしく主体と象徴界との乖離であり、また象徴界に「住む」われわれと象徴界に「所有される」精神病患者の間の決して越えられない溝を意味するものと思われてくる。この面接は2年半近くかけて、ようやくCIと私とがいかに出会えないかを確認したともいえるだろう。しかしながら、そのことに心理療法的な意味がまったくなかったとはいえないと思う。どういう次第で自分が精神病患者の道を選んだかを誰かに見届けられたこと、それがこの面接で達成されたものと見なすことはできないだろうか。夢3では「処刑」のことを共に悲しむ友人が登場する。この無力でささやかな、しかしCIにとって心理療法以外では得がたい本質的な共感を行なうことこそが、セラピストに求められた役割ではなかつたのだろうか。

夢3の連想で江戸時代の名僧、白隠禅師（1685-1767）の逸話が語られた。これは、白隠が松陰寺（静岡県沼津市）の住持をしていた頃、門前の信者の娘が嘘をいって、白隠が赤子を引き取るようになったという話であり、白隠は雪中赤子を抱いて托鉢したという（直木、1975）。まずここに性のモチーフがあることに注意される。CIの心は性に強烈に牽引される一方で、それに対して無関心に振る舞おうと試みてきた。また「この歳まで性体験がない。そんな自分が偉いとも思う」（#14）と述べており、性から距離を置くことにある種の価値を見出していた。それゆえCIは、性に関し

て動揺しない、禁欲的な禅僧の姿にある種の自我理想を見ていたと考えられる。夢3では、CIが父の名の受け取りを自ら拒否し、現実界の真っ只中に放り出されたまま、象徴界との凄まじい緊張関係に立たされ、激しい怒りを喚起させられている、精神病患者特有の根源的主体のありさまが表現されているが、そうした自らの主体のありさまを直視しながら、彼は白隠を想起する。CIは、白隠に自己愛的に自らを重ね、白隠のイメージに包まれ匿われることによって、根源的=精神病的主体の極度の緊張、怒りを緩和しようとしていたように思われる。ここには誇大妄想構築の心理メカニズムが伺えるように思われる。誇大妄想とは、現実界に曝された危機的な主体（根源的=精神病的主体）が、その主体に相応しい＜私＞を無制限に自己愛的に構成し、その＜私＞に包まれ匿われることによって、象徴界との間で生じる凄まじい緊張を緩和する試みであると考えられる。

ここで白隠に押し付けられた赤ちゃんのことを考えてみたい。本来所属すべき場、「本当の家族」から引き離された、寄る辺ない赤ちゃん。この赤ちゃんのイメージの背後には、CIの「今の家族は本当の家族ではない」という思いが籠められているように思われる。今自分のいる場所が「本当の家族」のところではないという妄想（家族否認症候群）は、そもそも結局どこにも自分は所属するところがないということ、根本的な所属感の欠如、すなわち、象徴界に足場がないこと、登録されていないことに基づくものではないだろうか。それは現実界の中の主体、根源的主体のありようである。アニマによって現実界に導かれたCIは、根源的主体を見出したが、その根源的主体に本質的に伴う寄る辺なさの感覚が、この赤ちゃんによって表現されていたように思われる。象徴界に根付きつつも、「永遠性」「神秘」「唯一性」等、現実界の感覚の失われぬ、根源的主体に真に相応する自己イメージこそが、「本当の自分」、本来的自己というべきものである（本来的自己は、宗教家や芸術家などによって探求されているものであろうが、本稿では詳しく述べる余裕はない）。たしかにCIは、自己の本来性に関する深刻な問題に悩まされていた。しかし、彼は「所属」という象徴界の規則にしたがって、どこかに「本当の家族」を想定し、

「本当の自分」を捜す、虚しい、妄想的な試みを行ない、本来的自己への道を誤っていたと考えられる。

CIは「本当の家族」を「朝鮮の伯父さんのところ」と考えることもあった。「鏡で自分の顔を見たら、オヤジの顔に似ている。オヤジの兄は朝鮮で死んだということだが、自分は実はその伯父さんの子どもではないか。それだったら、顔が似ていてもおかしくない。伯父さんの写真は小さい頃のしかなく、仏壇にそれが飾ってある。組織がぼくは伯父さんの子どもだと教えてくれているのではないか」（#7）と、CIは語っている（このとき父のことを「オヤジ」と些か親しみを込めて語っている点が注意される）。CIが鏡に向かいつつ、何とか妄想の辻褃合わせをしようとしているところが興味深い。鏡は現実の＜私＞を映し出す。根源的主体の実感である根本的な所属感の欠如と、父親に似ている鏡像=現実の＜私＞との齟齬を、彼は妄想的に解決しようとしている。後には次のように語られた、「B（「妹」に思われたロック歌手）は、組織と結び付いている父と母のところは危険なので、伯父さんの子どものぼくと交換された。病識はありますよ」（#107）。ここで子どものCIと「妹」=Bは、共に白隠が押し付けられた赤ちゃんのポジションにある。「妹」=Bは、「本当の自分」の「所属」すべき場=「本当の家族」として、伯父さんのところを妄想的に指し示す存在となっている。

また夢3の連想として、映画「リンチ」（日本公開時のタイトルは正確には「影の私刑（リンチ）」）のポスターのことが語られたが、この映画はフランク・ロッドム監督の1983年の作品で、アメリカ南部の士官学校で密に行なわれるリンチの解明に、ひとりの上級生徒が立ち向かうという物語である。そのポスターにあったとCIのいう（私はインターネットで検索してみたが、そのような絵柄のポスターは見つけられなかった）「皮のピキニの女の後姿」には、おそらくCIがそこに感じた凄まじい緊迫感のことを述べようとしていると思われる。これはCIを現実界へと導き、彼を精神病的危機の真っ只中に置く、その意味で迫害的なアニマのイメージをあらわしていると考えられる（夢2に関して語られた「女やくざ」も、そうしたアニマのイメージであろう）。

以上の臨床事例の分析考察は、次のようにまとめられる。主体（CI）は面接過程の中で、父の名を体得すべき場へと再び導かれた。主体を導くものはアニマ像（「妹」に思えた女性たち）であったが、そのことは現実界侵犯の罪の意識を生じさせた。そして主体は、父の名を体得すべき場において、父の名の課す去勢を建設的な体験にできず、激しい怒りを喚起させられるだけで、父の名の受け取りを自ら拒否し、象徴界の外、現実界の真っ只中に留まったまま、象徴界との凄まじい緊張関係に立たされた（そのような象徴界が「組織」と呼ばれた）。そこに精神病患者の根源的主体のありさまが伺える。この心理療法はそのことを確認するために行なわれたようにも思われる。誇大妄想は、現実界に曝された危機的な主体（根源的＝精神病的主体）が、その主体に相応しい＜私＞を無制限に自己愛的に構成し、その＜私＞に包まれ置かれ守られることによって、象徴界との間で生じる凄まじい緊張を緩和する試みであると考えられる。家族否認症候群は、アニマに導かれ現実界の真っ只中で見出された根源的主体における、根本的な所属感の欠如に基づくものであると考えられる。

4. 総合的考察

(1) 精神病的主体

『ブランピラ王女』の主人公ジーリオにおいても上の臨床事例においても、恋愛の問題、すなわち、アニマの問題に絡んで父の名が問題化し、誇大妄想に陥った主体が、父の名の体得という課題に取り組むことになった。しかしその結末は大きく異なる。その課題をジーリオはクリアし、CIは失敗する。両者の違いは何であろうか。

まずジーリオにとって、かつて父の名は体得されており、鏡像段階以来の現実の＜私＞は、象徴界に組み込まれた主体Sによって真に同一化され、我が物となっていた。この点で彼は決して精神病患者ではない。しかし恋愛の問題（アニマの問題）の絡みで父の名の問題に直面したとき、主体は去勢を怖れる余り、すでに体得されていた父の名を一旦放棄する^{註4}。しかしすでに去勢は是認され、父の名が主体の許に到来している

ので、去勢を是認した＜私＞、現実の＜私＞が一方で堅持され、その＜私＞と去勢を否認した＜私＞との分裂が起こる。前者がドッペルゲンガーとして、現実を知らせるために後者の許に出現し、去勢を認めたくない後者を恐怖に陥れる。またこうした＜私＞の分裂に呼応して、父の名もまた、去勢を認めたくない主体の側と去勢を認めさせようとする＜他者＞（言語）の側に分裂する。そのことによって、去勢を否認した＜私＞＝誇大妄想的な＜私＞と、去勢を是認した＜私＞＝現実の＜私＞＝ドッペルゲンガーの分裂が持ち堪えられる。そうして主体において、次第に父の名の体得に向う心的過程が進行していく。そうした過程を『ブランピラ王女』は描いていたと考えられる。

一方、CIの場合、彼が精神病患者であるならば、彼の許には父の名が到来したことは一度もない。鏡像段階以来の＜私＞は、主体にとって真の意味では同一化され、我が物となっておらず、一見彼がもっているように見える現実的な＜私＞は、彼自身の実感とは別に、これまでの単なる外的な模倣と、周囲の人々による「きみは……だ」という規定によって構成されてきたと考えられる。そして主体が父の名の問題に直面したとき、父の名は彼にとってただただ不可解な迫害的なものとして立ちあらわれ、その体得の可能性は閉ざされたままであったと考えられる。CIの場合、＜私＞の分裂（彼は「二重人格」と語った）は、ジーリオにおけるそのように父の名の分裂に呼応し、父の名の分裂の統合によって統合されるものではなく、統合される可能性のないものである（CIはその統合を夢見ていたが）。というのは、CIの場合、一見現実的な＜私＞は、特にわれわれと同じような現実の生活を何とか送らせようという主に精神科医療の試みによって、元々実感を欠いた＜私＞が強化されているにすぎないからである。しかしながら、そうした＜私＞があるからこそ、CIは交通費と治療費を払い、自ら心理療法を受けに来ることができたのも事実である。自らが精神病に陥った経緯をセラピストという他者と共に確認する作業を望む主体が、そうした＜私＞を利用したと考えることができるかもしれない。

精神病患者には去勢に対する耐性が完全に欠如していて、そのため去勢は、建設的な効果をなら本質的に

は及ぼすことなく、結局ただただ迫害的なものとして、激しい怒りを喚起するだけに留まってしまおうように思われる。ここで境界性パーソナリティ障害の特徴とされる「不適切で激しい怒り」(DSM-IV-TR) が想起されるが、それは精神病者の怒りとどのように違うだろうか。境界性パーソナリティ障害の場合、怒りは、常に具体的な他者、小文字の他者に対する怒りである。よくあることだが、彼らの怒り(攻撃性)が屈折して自分自身に向かい、自傷行為や自殺企図に到るときも、その行為には「こんなに苦しんでいることをわかってほしい」という他者へのメッセージが、彼らがそれをどれほど意識しているかは別にして、込められており、結果を見れば、その行為によって他者を動かそうとする意図はあきらかである。彼らには、他者に対する期待を失っていないどころか、期待しうることを必死で信じようとしている印象を受ける。彼らにとって父の名は完全には欠如しておらず、ただその体得が充分ではなく、心理療法によって父の名の体得のやり直しは可能なのではないと思われる(詳細は別稿で論じたい)。彼らは具体的な他者(小文字の他者)の背後で働く父の名に対して迫害性を感じ、そのことを、その他者と同一の平面(象徴界)に立って、その他者に向けて必死で抗議しているといえる。精神病において怒りは、言語システムとしての<他者>、大文字の他者そのものに向かっており、怒りが小文字の他者に向うときも、その他者が大文字の他者の側にいるからである(CIにとって、親は「組織」と結び付いているために、怒りの対象となると考えられる)。

(2) 対象 a

ユング心理学に親しんできた私には、CIのいう「妹」に、男性の心に生きて働くアニマの純粋な姿を見る思いがした。ユングはいう、「アニマが投影されるときにはいつも、直ちに奇妙な歴史的な感情が起こる。それをゲーテは『遠い昔、おまえは私の妻か妹であった』と表現した」(Jung, 1931/1970, par. 85)。しかしながら、「前世」という距離感を以って「妹」のよう^に感じられる「正常」な場合と、現に今、文字通り^に「妹」であると思う「精神的」な場合の違いは何であろうか。ヒルマンによれば、精神病者には客観化する元型的な力、イロニーで以って自らを見返す神的

な力——その神話上の形象としてギリシア神話のヘルメスが挙げられる——の作用が欠如しているという(Hillman, 1985)が、その説明では充分ではないように思われる。現にCIには自己諧謔が見られ、以前の論文(西村, 1998)で私は、ヘルメスの力が彼において働いていたと、ヒルマンの論を参照しつつその論に矛盾するようなことを述べている。

先に述べたように、私はユングのアニマを、ラカンの観点から、物自体に相応するイメージを紡ぎ出し、主体にイマジネーションを喚起することによって、主体を現実界にかぎりなく接近させ、本来的自己を見出させる存在として捉え直したい。またアニマと連動して働くアニムスに関しても、それは言葉の機能であり、現実界に接触した主体が、言葉によって主体を象徴界において立ち上げる過程、すなわち、フロイト(Freud, 1933/1960)のいう「エスがあったところに、私が生じるべきである」(Wo Es war, soll Ich warden.)を導く——その際、本来的自己になることが理想である——存在として捉え直したい。このようにアニマとアニムスを捉え直すことによって、CIの「妹」妄想の本質へとアプローチすることが可能になるように思われる。彼はAさんにアニマを見出し、それに導かれ、現実界に接近していった。そこでは主体において真に言葉の機能(アニムス)が問われ、単なる外的な模倣は無効となる。ここでアニムスが働き、主体を現実界から象徴界において立ち上げることができていれば、CIは精神病への突入を免れえたであろう。しかし元々父の名が体得されておらず、象徴界に真に足場を持っていないCIにとって、それは不可能なことだった。CIは、象徴界から「妹」というシニフィアンを取り外し、象徴界内部での隠喩としての役割を離れて、現実界に由来する「永遠性」「神秘」「唯一性」等(物自体の特性)を直接的に担いうるシニフィアンとして、すなわち、神話的=元型的イメージを担いうるシニフィアンとして用い、それと彼女をどうしても一対一対応的に結び付けてしまいがちになった。CI自身は、「妹」と対になる存在として自らを見出し、やはり「永遠性」「神秘」「唯一性」等、神話的=元型的イメージを直接的に担いうる、「兄」というシニフィアンとどうしても同一化してしまいがちになった(この「兄」

は、機能を失ったアニムス、形骸と化したアニムスといえよう)。そして精神病突入を決定的にした瞬間が来た。すでに述べたように、父の名の不可解な呼び掛け(彼がAさんに電話で思いを伝えたとき、電話口から聞こえてきた不可解な音声)を彼は聞いたのであった。

ラカン理論の中で、こうしたアニマの働きを担う概念があるように思われる。対象a (objet a) である。対象aとは、主体が象徴界に組み込まれたとき(Sが $\$$ となる時)、永遠に失われた対象であり、欲望の原因となり、欲望を掻き立て幻想を紡ぎ出し、主体を現実界へと繋げるものである(幻想は $\$ \diamond a$ と表記される)。その繋げ方は、主体を直接的に現実界に曝すという仕方ではなく、主体を幻想(イマジネーション)の中に匿いつつ、かぎりなく現実界に接近させるという仕方である。「現実界は幻想を支え、幻想は現実界を匿う」(Lacan, 1973, p.41)といわれるように、幻想は現実界の基礎の上に、現実界に相応する形で生じる現象であり、そうした幻想によって主体は間接的な仕方でも現実界と関係付けられる。

ラカンは対象aを具体的に説明するために、フロイトが論文「快樂原則の彼岸」(Freud, 1920/1955)に記載した彼の孫エルンスト(一歳半)の糸巻き遊びを取り上げている。娘夫婦の許に滞在していたとき、フロイトはそれを観察した。エルンストは紐を巻きつけた木製の糸巻きをもって、彼はそれを自分の小さなベッドの中に投げ入れ、「オーオーオー」と声を出し、それから紐を引っ張って再びベッドの中から外に出し、嬉しげに「いた(Da)」という言葉でそれを迎えた。それは倦むことなく何度も繰り返された。ここで「オーオーオー」は「いない(Fort)」だと推測された。この「いない/いた」遊びにおいて糸巻きの意味するものをフロイトは母親だと考えた。つまり、この遊びは、母親が自分の傍にいつもいるわけではないという辛い現実を、この子なりに受け入れるための試みだったと、フロイトは考えた。ラカンはこの遊びに、言語活動の起源を見出している。シニフィアンの本質は差異である。この糸巻き遊びには、「いない」と「いた」の対立としての差異が見られる。エルンストは、「いない」と「いた」のシニフィアンを創出し、それ

を糸巻きに対して適用している。ラカンによれば、主体——この場合 $\$$ ——は、それを基礎付けるシニフィアンがなければ存在することはなく、「最初の主体が母であるのは、『いない/いた』のシニフィアンの対によって構成される最初の象徴化があったかぎりにおいてです」(Lacan, 1998, p.189)。そしてラカンはこの糸巻き=最初の主体=母を対象aと見なす(Lacan, 1973)。これは次のように考えられる。エルンストは、母が彼の許を去っていったとき、寄り辺ない不安に襲われたであろうが、このとき彼は失われたもの=母を思い、希求し、その母を糸巻きに託し、その糸巻きに「いない/いた」のシニフィアンを適用し、その母を象徴界の中で取り上げ、そうして母を主体として樹立したと考えられる。その際、母はエルンストと一体となっていた母であり、象徴界の中に彼自身の主体 $\$$ はそのものとしてはまだ生じていない^{註5}。対象aとは、根源的主体Sが象徴界に入る直前で生じる、失われた母子の一体性、すなわち、根源的主体の状態を指し示す対象である。それは根源的主体の感覚をリアルに保持している。

「対象aは、主体以前(présubjectif)にあり、また主体の同一化の基礎にあり、主体によって否定された基礎にあります」(Lacan, 1973, p.169)。ここで「主体以前」とは $\$$ 以前であり、鏡像段階以前、すなわち、根源的主体の境位である。根源的主体は、母と一体となった存在であり、いまだ<私>とは呼べないもの、鏡面に<私>が見出される(鏡像と同一化する)以前に、それに先立って鏡の前に存在しているもの(「同一化の基礎」)である。<私>は、根源的主体の母子一体性が「否定される」形で、鏡面上で構成される。対象aとは、こうした<私>の構成以前の根源的主体の境位を指し示すものである。

対象aとは、「現実界の接近の結果起こるある原始的な分離、ある自己切断からあらわれる原始的な対象」(Lacan, 1973, p.78)である。幼い子にとって対象aとは、「乳房、ウンチ、眼差し、声」(Lacan, 1973, p.219)である。まず乳房、眼差し、声を考えてみよう。上のエルンストの例のように、幼い主体にとって、すぐ傍にあって、自らと一体であった母の乳房、眼差し、声が、自らの許から消え去り、不安な寄

る辺ない状態に置かれるとき、すなわち、現実界の接近するとき、これら乳房、眼差し、声と共に自己のかけがえのない本質的な部分が喪失してしまったこと（「自己切断」）が感じられる。そしてこれらを切なく想起し希求する思い（欲望）がこみ上げる。

では、ウンチはどのように考えられるだろうか。オムツを母に換えてもらっている幼い子の心理を想像してみよう。自分の一部分だったウンチが自分から離れ、母の感嘆の声（「あら、まあ！」とか「たくさん出たのね！」とか）と共に一体どこに消えてしまうのか、幼子はとても不思議に思うのではないだろうか。それはまさに「自己切断」であり、切り離され消えてしまったものこそ、自己のかけがえのない本質的な部分であると感ずるのではないだろうか。つまり、幼い主体は、ウンチという素敵な贈り物によって母を喜ばせ、母と繋がった至福のときの到来を再び求める（欲望する）ようになるのではないだろうか^{註6}。

乳房、ウンチ、眼差し、声としての対象aは、かつて母子一体の状態において存在した物自体（正確には、そうした物自体に相応するイメージを担う対象）であり、物自体としての主体、根源的主体の感覚をリアルに保持している対象である。それらを希求することで、主体は母子一体の至福の状態を希求している。対象aの惹起する幻想は、いわば母子融合、母胎回帰の欲望に駆動されているといってもよい。対象aは、近親相姦の対象としての母、物自体としての母、「神話的な母の身体」（Lacan, 1986, p.127）をめぐって、主体のイマジネーションを現実界へとかぎりなく掻き立てるものである。たしかにわれわれにとって対象aはさまざまな形であられ、われわれの欲望はさまざまな形態を取りうる（恋人の眼差し、声、仕草＝対象aを想起し、たまらなく会いたいと思うこともあるし、かつて住んでいた街の佇まい＝対象aを想起し、たまらなくそこに帰りたいと思うこともある）が、その根底にはこのような母＝物自体への、永遠にその充足を遷延された欲望が横たわっているといえる。このように対象aは、母子一体の幻想を惹起することによって、象徴界と想像界と現実界の接点に主体を導き、主体を本来的自己に目醒めさせると考えられる。これは先に論じたアニマの機能に相当する。またこのように考え

てくると、アニマを指し示すシニフィアンとして「妹」が選ばれる理由もあきらかになってくる。兄と妹は、生物的身体存在としては、同じ由来（母親）をもつ。兄妹関係の背後には、物自体としての共通の母がある。永遠に失われた母、物自体としての母に向けてノスタルジックなイマジネーションを掻き立てるアニマは、主体が男性であるならば「妹」、そして主体自身は「兄」と名付けるのが相応しいだろう^{註7}。

文献

註4）ここには作者のホフマン自身の悲痛な恋愛体験が反映されていたように思われる。1808年11月、ホフマン32歳のとき、彼はバンベルク劇場に音楽監督として招聘され、間もなくマルク領事未亡人を紹介され、その娘ユーリアの音楽の家庭教師をするようになった。2年ほどユーリアを教えているうちに、ホフマンは彼女に熱烈な恋をするようになった。彼にはすでにかわいい妻がいた。ユーリアへの恋で彼は、「自己の破滅の危機」（1812年2月5日の日記より）を体験した。1812年、ユーリアは資産家の商人の息子を結婚する（ザフランスキー、1994）。この失恋は、まさに去勢の体験として、去勢のイメージを伴って以後の作品の中に表現されていったように思われる。この失恋以降、ホフマンは創作を通して、去勢の否認によって自らに生じた精神病様の事態を見つめ、父の名の体得のやり直しという課題に取り組んでいったように思われる。「砂男」（1815）、長編『悪魔の霊液』（1815～16）などでは、父の名の体得のやり直しは不成功に終わり、主人公は悲劇的な結末を迎えるが、『ブランピラ王女』（1820）に到ってようやくそれが成功したように思われる。

註5）新宮（1995）によれば、「子供が糸巻きを投げ、それを視界から消し去るということは、母親が子供を捨てるということを含意している。糸巻きを投げる子供は、母親の立場に立って、いわば自分自身を放り投げているのである」（p.153）。糸巻き遊びにおいて象徴界に生じた主体が母の主体であるならば、このような見方も可能であろう。

註6）西山（2009）は、絵本「しずくのぼうけん」（作：マリア・テルリコフスカ、絵：ボフダン・ブテンコ、訳：内田莉莎子、福音書店、1969）のしずくちゃんを対象aとして解釈している。しずくちゃんが水道管を流れ、蛇口から出てくるところなどは、たしかにウンチを連想させる（水道管は腸管を連想させる）。西山は心に残っている絵本に関するインタビュー調査をおこなったが、「しずくのぼうけん」が心に残っていると

いう23歳の女性は、小学1、2年生のとき、外で働く母の帰りを待つ間、何度もこの絵本を読んでいたという。しずくちゃんは、母が傍にいたような幻想を掻き立てて、彼女の心を支えるものとなっていたようだ。

註7) ラカンは、男女の性別の相違を彼の理論によって図式化しているが、その際、主体 $\$$ は男性の側に、対象aは女性の側に置かれている。これは、男性的主体 $\$$ は女性における対象aと繋がることによって、フェルスによって制限された享樂を超えること、すなわち、より現実界への接近が可能であることを意味している(Lacan, 1975)。女性的主体——ラカンは $\mathcal{L}a$ と表記——と対象aとの関係については、別稿で論じたい。

西村則昭 「心理療法における『死と再生』再考(1)」『人間学研究』, 7, 41-56, 2008a.

西村則昭 「詩の研究ノート(2)——物それ自体へとかぎりなく誘う女性という存在」『仁愛大学附属心理臨床センター紀要』, 3, 43-60, 2008b.

西村則昭 「心理療法における言葉の体験」『心理臨床学研究』, 26(6), 698-709, 2009.

西山小雪 「絵本之力——大人が絵本を読むことの意義——」, 仁愛大学大学院修士論文(未公刊), 2009.

新宮一成 『ラカンの精神分析』, 講談社現代新書, 1995.
ザフランスキー, R., 識名章喜訳 『E・T・A・ホフマン——ある懐疑的な夢想家の生涯』 法政大学出版局, 1994.

文献

- Freud, S. Beyond the Pleasure Principle. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, 18, London: The Hogarth Press, 1920/1955.
- Freud, S. New Introductory Lectures on Psycho-Analysis. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, 22, London: The Hogarth Press, 1933/1960.
- Hillman, J. On Paranoia. *Eranos Jahrbuch*, 54, 264-324, 1985.
- Jung, C. G. Mind and Earth. *The Collected Works of C.G. Jung*, 10, Princeton University Press, 1931/1970.
- 河合隼雄他訳 『人間と象徴 無意識の世界(上)』 河出書房新社, 1975.
- 木村敏・坂敬一・山村靖 「家族否認症候群について」『精神神経学雑誌』, 70, 1085-1190, 1968.
- Lacan J. D'une question préliminaire à tout traitement possible de la psychose. *Écrits*. Paris: Éditions du Seuil, 1955-56/1966.
- Lacan, J. *Le Séminaire Livre XI Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*. Paris: Éditions du Seuil, 1973.
- Lacan, J. (1975) : *Le Séminaire Livre XX. Encore*. Paris: Éditions du Seuil, 1975.
- Lacan, J. *Le Séminaire Livre III Les psychoses*. Paris: Éditions du Seuil, 1981.
- Lacan, J. *Le Séminaire Livre VII L'éthique de la psychanalyse*. Paris: Éditions du Seuil, 1986.
- Lacan, J. *Le Séminaire Livre V Les formations de l'inconscient*. Paris: Éditions du Seuil, 1998.
- 直木公彦 『白隠禅師 健康法と逸話』 日本教文社, 1975.
- 西村則昭 「妄想のある青年の心理療法」『心理臨床学研究』, 16(2), 150-161, 1998.